

# 肝属川の水利をめぐる民俗知と川-人関係に関する調査研究

難波美芸・寺尾萌・伴野文亮

## 遊ぶ・食べる

昭和四〇年代頃までの子供時代の記憶から現代の河川保護活動へ

プロジェクト開始当初に想像していた「川-人」関係は、水資源利用や防災につながる、ローカルな知の基盤となるものであり、そのような知識は大人が有し、運用しているものだという無意識の前提があったが、実際に聞き取りをしてみると強調されたのは子どものころの経験や記憶だった。

### 遊びのなかで育まれる生活者感覚（昭和30~40年代までの記憶）

- ウナギの延縄、穴釣、竹筒の仕掛け、ハヤ（ブトンゴロ、ブッゴロ）のなげ網、毛ばり釣り、サワガニ、モズクガニ（ヤマタロウガニ）の穴釣り、アユ、コイ、フナ
- 淵の岩場や、川岸の泥だまり、雨が降ったあとの畔の用水路など、魚（ウナギ）がいる場所をよく知っていた。
- 川に生息する魚や水生生物を獲って食べることは、川が源流をもつ里山で狩りをしたり、田畑を耕して食物を得ることと同様に、生活の糧であり、生活の一部。
- 鹿屋市街地の豊富な湧水の様子と、その湧水を利用していた記憶。用水路を利用したブタの飼育。



生活のなかにあるからこそわかる川の変化—変化してもなお生活の中にある川や湧水と人のつながり

子どもの頃に川に潜って遊んだ経験は、自分自身の感受性が育まれるうえでとても重要で決定的な影響を与えたと思う。（始良川河川愛護会小浜さん）



### 現在の「伝える」活動の動機に—

## 笠野原台地と高隈ダム建設



- 笠野原台地は、シラス台地のため水層が極めて深く、慢性的な水不足の地域。
- 笠野原台地への農業用水を供給する「国営笠野原農業水利事業」の根幹施設としてダムが建設された。（1963年8月着工、1967年2月完工。）

いやじゃいやじゃよ  
笠野原はいやじゃよ  
はアよいこい

## ダム建設反対運動

- 受益農家と水没地の住民それぞれから建設反対論が噴出。前者にあつては、賛否双方の対立が深まり、近所同士が絶交するなどの深刻な状況。
- ダム建設に伴って旧上古園、下古園集落（田・畑・山林の計80ヘクタール、家屋204戸）が水没、立ち退き対象に。
- 立ち退いた住民のその後は？ → 今後の研究課題

## 語りつぐ

安藤一夫さんの証言

「昭和三十一年度（中略）その頃より畑地かんがいの話を聞くようになり、最初の意向調査では私の部落も水がくればと喜んで賛成した。その内反対運動が広がり（中略）、私の妻などは反対派の婦人から嫌味を云われ泣いて帰る事も度々あり、署名の打合せに来た県の職員の方と反対派に取りかこまれ暴言の限りを浴びた事もあったが、私は水の利用が農作物の増収になる事を疑わずじっと堪忍んだ。」（安藤一夫「発刊にあたり」『笠野原台地』）

### 安藤一夫さんの功績

- 1990年（平成2）に笠野原開発資料館を建設。
  - 同館には、開発の歴史にまつわる文書や写真のほか、書籍や民具といった住民の生活の実像をいまに伝える歴史資料が多数存在。
  - 『笠野原台地』（私家版、1991年）を制作・発行。
- いずれも笠野原地区の人々の歴史を知るための貴重な歴史資料！  
⇒所蔵資料と建物、郷土史の保存に情熱を滾らせた安藤さんの〈想い〉を適切にアーカイブ化し、地域の歴史を紐解くための文化財として未来に伝える必要性。



## メディアーション

人工物を介した川とのかかわり



高学年になると勝手橋を架けるなどの即興的なインフラ作りも。

台風等による急激な増水の際には自然と流失して川の水位を下げため、環境の変化に対して柔軟。自然の完全なコントロールを目指してきた近代的な剛構造のインフラとは異なる、自然の中に棲まうインフラ。



柴井堰 — 串良川に毎年3月頃に柴井堰が設置されると、下流側の農業用水路に水が送られる。近隣の山で伐採したマテバシイを用いて土地改良区事務所と地域住民の手作業で作られる。

行政 vs. 住民という構図を超えた協働は、九州河川協力団体連絡会議という制度によって基礎付けられながら、各団体の主体的な「楽しみながら川を守る」種々の活動によって可能になっている。



魚道の確保 — 始良川河川愛護会の活動種アユの放流だけでなく、井堰による魚類の遊上阻害を改善するため行政と長い時間をかけて河川施設を改善。

子供時代に作ったモノ、道具 — 年長者に教えられながら、あるいは見よう見まねで、身近な素材（竹、木の枝、木綿糸、裁縫針、自転車のタイヤホイールのスポークなど）で漁具（釣り竿、仕掛け、水中銃、銚など）をつくった記憶。

そもそも食べるものも変わったし、スーパーでなんでも買えるし、川で遊ぶのは危険と言われる。

コイ釣ったらめんどくさいし、困るし、自己嫌悪。食べるまでをちゃんと教えなきゃいけないのでは？

子どもたちが釣りに行かなくなった、川で遊ばなくなったのはなぜか？



## 合流

ワークショップ

川に着くまでの道すがら出会う人やものたちも大事だった。

大人になってから初めて川に入っても【子どもの頃と同じような】感動は得られない。

## 地域と世代を超えた交流

2024年3月17日鹿屋市北田SARUGGAで実施したワークショップには北田商店街、鹿屋市街地、吾平、高隈から21名が参加した。幼少期の経験と記憶、現在抱えている危機感とこれからの川との関わり方について活発な意見交換が行われた。



調査にご協力いただいた地域の皆様  
ありがとうございました。